

## 1章 「観点をもつ」

# カメはどうやって園庭に行ったの？

継続して飼育活動をしている子どもたちは、生き物との関わりから、感じたことや気付いたこと、不思議に思ったことを、確かめたり調べたりするようになります。次第に生き物の特徴や生態を知ること、飼育の仕方や関わり方が変容していきます。本事例は、「科学する心」が育まれている子どもたちの姿を捉える観点をもち、保育の記録から、主題に関する体験を読み取る工夫をしています。

### 京都市立中京もえぎ幼稚園

5歳児

#### 1. はじめに

**【子どもの実態】** 遊びたい気持ちはあるが、体が動き出す前に頭で考えてしまって動けなかったり、周りの大人の反応や友達の思いが気になり、自分のしたいことができなかったり、やりたいという強い思いをもてずに何となく遊んだりしているような姿がある。

**【保育者の願い】** 子どもたちには、頭で考える前にまずは心や体を動かし、様々なことに興味をもって関わり、満足いくまで十分に楽しんで欲しい、夢中になって遊んで欲しい。

#### 2. 注目する場面や考察の観点を共有する

**取り組みのテーマ：**「人と関わり夢中になって遊ぶ」

3歳児：したい遊びがはっきりし、これがしたいと強い思いをもって遊ぶこと

4歳児：大好きな友達と一緒に思いを出し合いながら遊ぶこと

5歳児：友達と一緒に共通の目的をもって遊ぶこと

**「科学する心」についての考え方：**子どもが夢中になって心を動かして遊ぶ中でこそ、「科学する心」が育まれていく。特に人と関わりの中で夢中になって遊ぶことによって育まれる「科学する心」を以下の3点と考える。

- ・どんな思いも受け止めてもらえる安心感から育まれる好奇心
- ・大好きな友達との関わりの中で共に考え、作り出していく楽しさの体験
- ・仲間と共に身の回りの出来事に驚き、感動し、想像する心

**方法：**

- ・前年度の研究を活かす。

夢中になって遊ぶことから、子どもたちが人との関わりを、保育者から大好きな友達へ、そして学級や学年のみんなへと広げながら、「思いを出す」「向き合う」「つながる」体験を繰り返していくことの大切さが明らかになった。そこで、この3つの体験を、「記録する場面の選択」や「体験や成長の読み取り」の視点とする。

- ・人と関わり夢中になって遊ぶ子どもたちの姿を記録し、「科学する心」を育てていく体験を捉える。

**考察の視点：**「思いを出す」「向き合う」「つながる」「保育者の援助」「環境構成」を用いる。

- ・事例の記述では、「科学する心」を育む経験（思いを出す、向き合う、つながる）にそれぞれ網掛けをし、保育者の援助、環境構成には下線を引く。



#### 3. 事例 飼育動物と関わる

事例までの様子：4歳児の時に、飼育していた生き物が死んでしまった経験をしている子どもたちが、5歳児になった5月上旬、幼稚園で2匹のカメに出会い、喜んだ子どもたちはクラスで飼育することになった。当初は保育者がしていた世話を子どもたちがするようになり、日々、カメの「カメキチ」と「カメタ」の世話や関わりを楽しんでいた。ところが、カメキチがいなくなった。何とか探し出そうとしたが、見付からない日々が続いた。園全体の関心事となった。

1週間後の大雨の後、いつもと違う砂場でカメが見付かった。砂場でカメが見付かるというビッグニュースに、多くの子どもが驚き、心を動かされた。特に、5歳児は何度も園庭を探していたため、「何故?」「今ここに?」と驚き喜んだ。保育者も予想もしなかったことに大変興奮した。園内中が喜びを共感した。また、このことを保護者とも一緒に喜び、カメの命が守られたことへの喜び、安堵感、大切にしたいという気持ちに繋がったと考えられる。園内のみんなが一つのことに関心を寄せたことが、子ども一人一人の心を大きく揺れ動かすことに繋がったと考えられる。



## 事例【カメキチはどうやって園庭へ行ったのか？】

5月

次の日、学級で集い、カメキチはどうやって砂場に行ったのかを考えた。「カメキチは水が好きだから水の**ある場所を探したと思う**」「園庭が広いから行ってみよと思ったんじゃない？」と**カメキチの思いを推測する**子どもたち。「でも、どうやって2階から1階へ降りたのかな？」と保育者が不思議そうに言うと、子どもたちの推理が始まった。「滑り台を滑ったと思う」「でも、怖いから首と手を縮めて滑ったと思う」「私らが滑る時はこう向き（おしりが下で前向き）だからカメキチもこう向き（甲羅が滑る面に接する向き）で滑ったんと違うかな？」と**実際に体を動かしてカメキチになったつもりで考え、伝える**子どももいた。「違う、向こうの（園舎内の）階段やと思う。だってあっちの階段の方が降りやすいし、それから竹間公園に出たと思う。それからグルって行って、門から園庭に行ったと思う」という意見もあったが、それには**反対の意見も出た**。「でも、道路は車とか走って危ないし、（道を）通っている人にすぐ分かるやん」「だーれも見てへん間に通ったかもしれんで」と互いに顔を見合わせて話している。他にも、「築山の方が降りて行きやすい」「いいやあっちの（外の）階段やって。その方が安全に行けるって」と思い思いに保育者や友達と伝え合っている。そのうち、実際にカメキチがたどったであろう道を自分たちも行ってみよとする子どもが現れ、みんなでテラスに出**てみた**。テラスから滑り台の方へ行く子ども、築山の方へ行く子ども、途中をジャングルジムの方へ曲がり、ジャングルジムの滑り台を降りていく子ども、外階段から園庭へ向かう子どもなど、**それぞれが考える道を進んで、砂場へ向かった**。そして砂場のカメキチの見付かった場所に集まった。

しばらくして保育室へ帰ってきた子どもたち。今度はカメキチに話を聞いてみよと、カメのプールを保育室の中央へ運び、周りに集った。**カメキチを見つめ**、「どうやって行ったん？」と聞いている。そこで、**カメキチの気持ちに寄り添う子どもの姿から、カメになって遊ぶことを提案した**。腹ばいになる子どもたち、**カメの動きをまねたり、カメの歩き方で散歩を試みたりした**。保育者も、子どもと一緒にカメになって動いた。**カメの目線で動くことを楽しんだ**。そして再びプールのカメキチとカメタを見た。**カメキチから伝わってきたことを「カメキチの冒険」として絵に描いてみる**ことにした。子どもたちの絵を見て話を聞くと、御苑に遠足に行った、お花見した、公園の滑り台で遊んだなど、自分の遊んだ経験に思いを馳せ、想像して描いていることが分かった。カメが見付かった後も、子どもたちはカメに思いを寄せて遊んだ。



後日、大雨で砂場に水が溜まると、3歳児が砂場の水の中でカメを探して遊んでいる姿があった。

### 【考察】

**思いを出す**：子どもたちは、言葉や体、描画などで、その思いを表現した。カメに思いを寄せながら、カメを通して自分を表現している姿が見られた。子どもたちはそれぞれの表現の中で、自分が得た知識を表そうとしたり、想像の中で楽しんだりしている。幼児期には、この両方の要素が遊びの中に入っていることが、子どもの興味をより広げ、視野を広げていくことに繋がると考えられる。



**向き合う**：カメの生態を知っていることや、カメと一緒に暮らしてきた経験から、カメがどうやって砂場まで行ったのか疑問をもち、その疑問に対して自分の考えを友達や保育者に伝える姿があった。

**つながる**：生き物と一緒に過ごす生活の中では、考えの及ばないようなことが起こり、保育者も子どもも心揺さぶられる経験をする。その時に「感じ」「気付き」「分かった」ことを意識し、心情や思いを体や絵で表現した活動により、友達とみんなで体験を振り返り、共有することに繋がった。

**保育者の援助**：カメの行動やその理由を推測する子どもたちに寄り添い、イメージしやすいように助言したことで、カメへの興味や特徴などの理解が深まる表現活動に繋がった。

また、保育者も一緒に子どもたちと表現することで、思いや考えを共有した。今後も、心揺さぶられる子どもたちの中に芽生えた感情や、経験から得られた“実感を伴った知識”を大切にしていきたい。

**環境構成**：友達と言葉を共有しやすい場、イメージや推測をしやすい場、話し合う機会を作ることで、子どもたちの中に生まれた疑問を大切にすることができた。その疑問を考え合って明らかにしたことで、子ども同士で共有する体験に繋がった。また、表現活動の機会を設けることで、活動を振り返り、気付いたことや友達と共有したことが“分かる”体験になった。



ここで  
見付かったんやね！